

を食って、未消化のまま下痢気味であった人も、パンを食うようになって以来、胃腸のぐあいもよくなってきました。

私たちが警備するために、五百メートルくらいの位置に警備兵の宿舎がありました。多分内務省所属の兵隊だったと思います。人員は二十人前後だったと記憶しています。

明けて昭和二十二年の三月、私はこの警備兵宿舎の雑役につくよう命ぜられました。作業は宿舎の掃除から洗たく、炊事までまかされるのです。炭坑の作業に比べると、ここは天国でした。食事は十分にあり、警備兵と同じ黒パン、同じスープを食うことができました。収容所のスープは、くず馬鈴薯が二、三個入っているだけで、肉片など探そうとしても見つかりませんでした。警備兵宿舎のスープは、それこそ牛肉がふんだんに入っているのです。私はこの当番につけてもらったことを、神に感謝しました。地獄で仏とは、まさにこのことだったので。

ソ連の兵隊は、個人对个人の場合は、差別意識など

全くなく、私が日本人捕虜であることを感じさせないほど、一人の友人として接してくれました。ロシア語こそわかりませんが、彼らの素振りや立ち居振舞いで、大方は理解することができたのです。

二か月ほどすると、私は警備兵の宿舎に寝とまりするよう命ぜられました。夜になると、彼らがそろって外出するので、留守番の必要からのようでした。

炭坑先山から、兵隊の宿舎当番へ、今思うと夢のような三年間でした。

シベリア抑留記

静岡県 丸山 義信

私は昭和十六年三月召集され、広島市に集合して満州の黒河街第七國境守備隊八四部隊砲兵隊に入隊し、北方ソ満國境にいて苦勞もありました。昭和二十年二月となり関東軍師団司令部一五二四通信隊に転属し通信街に移動することになり、八月十五日に通化にて終

戦となりました。

ソ連との交戦もなく武装解除となり、さらに吉林市に集結の命令を受けて吉林市にてソ連軍に抑留となりました。九月になってなぜか朝鮮の清津に連行され、港に近いところに移動しました。港を見て日本に帰れるのかと思っていたが、別行動となった私たち百五十人の者はまた移動して琿春を経て馬にいろいろのものを積み、十一月三日に馬とともに歩いてソ連領ウオロシロフ地区のスソイフカの収容所に抑留されました。

この収容所には先に抑留された部隊がいて、この仲間全員が加えられて収容所の暮らしが始まりました。伐採作業が主であったが、立木の状況がよかったので遅くまでやってノルマは大方の者がやりました。近在に住んでいた一般住民からの要請により、これらの仕事もありました。切った材木の自動車積みが夜間に限って行われ、この積み込みの使役が夜になって来て、これにも苦勞がありました。

食事は黒パンにアワ、コウリヤン等の雑穀類で、月に一回くらい朝鮮米の米食がありました。いずれも

少ない量のため、水を加えての炊飯で、半年くらいの間に栄養不足となり体力の衰えが目立ってきました。

入浴も十分でなく、着替えは一切なく、シラミ取りは毎日の日課で、南京虫もいてこれには全く困りました。

栄養失調で死ぬ者も出てきました。野草は種類の別なく食って食事の足しにしておりました。雪の中にシラミのついたシャツを一晚置いてシラミを殺すことをやりましたが、卵は生きていてしばらくするとまた同様の状態でした。収容所の床が丸太のまままで毛布一枚では寝られず、丸太の合い間に枯れ草や木の皮を敷いてそれぞれが自分の寝る場所を造作しました。

その後、丸太で別棟の小屋を建てて、重なり合って寝ていたものをこの小屋に移す等のことをいろいろと自分たちでやりました。

仕事の合い間に住民の家に行き仕事の手伝いなどをやらしてもらい、食う物をもらってきたりすることをそれぞれにやりました。

祖国日本に帰る日を待つて生き抜くための苦勞や努力をお互いに考えてやってきました。こんな月日が過

きておりましたが、風の便りにダモイの話が流れて来るようになりました。昭和二十三年十月となり、今年もまた寒い冬を越すのかと暗い気持ちでおりましたが、突然ダモイの連絡がありました。幹部の者二、三人が残され、残り全員が貨車に乗せられてナホトカ港に向かつて出発しました。ナホトカにて民主教育があつて、これがよくないと元に戻されると聞きましたが、私たちは船の都合が順番のためか、十日間くらいの新ホトカの生活にて、十月十六日に山澄丸に乗って待ちに待った日本の港舞鶴港に上陸することができました。

凍原の虜囚

鳥取県 森田 廉

私は昭和十六年三月に満州奉天造兵所（関東軍兵器製造所）に単身出発就職し、現地入営。終戦は横道河子で迎え、武装解除となり、海林の天幕收容所に入る。

八月も終るころに突然海林街と別れることになった。待機している貨物列車に乗車せよと命令が伝わった。貨車の中は二段づくりで狭苦しい。一貨車に六十人の軍人が詰め込まれた。東満国境の町綏芬河駅を通過したのはたしか九月二日ころであった。日本への帰国かソ連領での銃殺か、はたまた強制労働か、三つに一つと心が動いた。そのうちに列車はウオロシロフという異国の町に到着して、引込線に入れられて我々も下車し、大草原に着いた。ここで当分の間草刈りして帰国を待つというほのかな希望も捨てなかつた。

大草原の中に自分たちの抑留される二重張りの有刺鉄線の囲いをつくり、四方の隅々には望楼と称した歩哨監視所をつくつてその中に入る羽目となった。九月の初めだというのにシベリアはずいぶん冷える。夜は寒くて人と人が寄り合つて暖をとり寒さをしのいだ。八月九日以来（開戦）毎日歩き通しで入浴などとても考えられない日々であった。着のみ着のまま作業しそのまま寝る。だからシラミがわいてきて我々の血を腹いっぱい吸い取つて、それでなくとも飢餓の